郵便報知新聞
第四百六十三号

誠の心ハ赤阪の溜池ふ析く蓮花濁ふ染ぬ
藝殿の梅吉其色と香ふ溺まとろ中島精
美ガ学びの道も何しか疎く且夕ふ色と酒と
忠心と兼ね是漫く地ある日と月ふ双親の嘆き
大方ある代と聴て愕然梅吉ハ好男子にして氏
君青年ふ迚ゆ代ふ英佛獨魯の学問ふ
心と留めぬ人ガ世ふも稀ある博士と云れぬふ
異質ある に賤妾ガ如き者ふ心と惑しぬるふ
最情臣と怨せしに男ハ彼ガ赤心ふ感服し
心と革め学の道ふ進しガ梅吉ハ云ハくひ
ありと喜びて己ガ細き絲竹の生活以て
燈火の價に資しかガ男ハ益感激し浮
る心替掛て讀書ぞめと勉励しとぞ
此ハ明治七年夏とろきくぬ
松林伯圓記